

ルカによる福音書——行伝 における「使徒」(ἀποστόλος)

五島 勝

一、問題の所在

1. 「使徒」(ἀποστόλος)の語は、ルカ以外の共観福音書には、極めて稀にしか用いられていない。マタイに一回(10・2)、マルコに一回(6・30)のみである。それに対してルカでは五回(6・13、9・10、11・49、17・5、22・14)用いられ、行伝の二九回を合わせると三四回であり、新約全体(七九回)の四三・パーセントを占める。そこで「使徒」はとくにルカ的用語であるとの意見が生ずる。

2. 新約聖書中、ルカを除いて「使徒」を最も多く用い、明確な「使徒像」、「使徒職観」を提示するのはパウロである。パウロは、「十二使徒」の存在とその正当性を容認している(1コリント15・5)。しかし、同時に、他の「使徒たち」、ユニアスとアンデロニコ(ローマ16・7)、バルナバ(1コリント9・6)、ヤコブ(1コリント15・5)などを「認めていた」と思われ

る。なかんずく、彼は自分自身が使徒たることを、信じて疑わなかった。これに対し、ルカは問題とされる行伝14・4、14以外では、すべて「使徒」の名を、イエスの「十二弟子」に限定して用いている。ここに「使徒」とは誰かの問題が生ずる。

(cf. C.K. Barrett, *The Signs of an Apostle*, Epworth, 1970)

3. ルカとパウロの問題は、誰が「使徒」であるかの問題にとどまらず、「使徒像」「使徒職観」の相異にまで至る。M. Dibelius, *Studies in the Acts of Apostles*, London, 1956は、この点に関して鋭い問題を投げかけた。その後クライン・シュミッタラは、両者の差異を強調し、そこにルカ神学の特徴を見ようとしている。(cf. C.K. Barrett, *New Testament Essays*, London, 1972, p. 78)

4. さらに、行伝十五章以下では、なぜ「使徒」は姿を消してしまふのか。行伝中のパウロ像と、パウロの自己理解とのギャップの問題は、さらにこの問題を複雑なものとする。(cf. Ph. Vielhauer, "On the 'Paulinism' of Acts," *studies in Luke-Acts*, London, 1968)

こうして、ルカは「使徒」を史実に即して、イエスの在世中から原始教団の発展の過程の中で描いているのか、それとも、彼自身の神学、または当時の教会の神学によって、「使徒」に関する歴史を創作したのか(コンツェルマン、ヘンケン)、あるいは、より古い資料を編纂したのか(トロクメ)という問題が生ずる。

これは福音的、使徒的教会を標榜する教会にとって、極めて重大な問題である。

申すまでもなく、世々の教会は、十二人の弟子が主イエス自身によって選ばれ、「使徒」として任命された(ルカ福音書6・13)と信じてきた。彼らはイエスの死後、彼の生涯と復活の「証人」(μαρτυρῶν)となり、ペンテコステ後のエルサレム教団の公的指導者となった。彼らは現実には教団の宣教、教育、政治の指導者として働き、教団にとって規範的役割を果たした。彼らこそイエス・キリストの権威の代表者であった。パウロは、この「使徒団」の「証言」と「伝統」を正しく受け継ぎ、異邦人教会を「使徒的教会」とらしめた。両者の福音は、同じ「使徒的」福音である。これが私たちの立場であろう。

しかし、もしルカの描く「十二使徒」が、史実に反する彼の創作であるなら、「使徒的教会」とはいったい何であろう。私たちは「これに対して是非とも答えてゆかねばならぬ」。

二、「使徒」(ἀπόστολος)の起源

ルカの描く「使徒」を学ぶに先立ち、福音書にも比較的用いられることの少ない「使徒」の起源について、研究者たちの意見を三つに大別しておきたい。

1、「使徒」をイエス自身に帰する立場

(ア)レングシエナルフは、彼の古典とも言うべき論文(TDNT, “ἀπόστολος”の項)の中で、イエスが自身が、当時のユダヤ

教のシヤリアハ、*šaliḥ* 制度に従い、自らの権威の代行者として弟子を選んだとする。いわゆる *šaliḥ-āpostolos* 論がこれである。多くの批判の中で直接これを容認するものは今はない。

(イ)ゲルハルトソンの神の代理者論——イエスと十二弟子との関係を、旧約の神と預言者の関係から立証せんとする。(cf. B. Gerhardson, „Die Boten Gottes und die Apostel Christi“ *Se. Ex. Ab XXVII* (1962), pp. 89-131, とくに p. 107)

(ロ)「十二使徒」の選出、職務への任命をイエスに帰して、タイトルとしての「使徒」は後代のものとする立場

デュボンがその代表者。(cf. J. Dupont, *The Sources of Acts*, London, 1964) サーフオーは、ルカこそ「十二使徒」とパウロの「使徒性」の一致を明確化したと考える。(cf. L. Cerfaux, “Pour l’histoire du titre apostolos,” *Recherches de science religieuse* XLVIII (1960) p. 90- Séan Freyne, *The Twelve: Disciples and Apostles*, p. 58 から)

(ハ)「十二使徒」のタイトルはもともと、事実としても、彼らが復活後に存在したことを否定する立場

(ア)パウロの「使徒」理解からの説明——ムンクは、「十二使徒」が反パウロ的使徒理解から成立したと考える。(J. Munk, “Paul and the Apostle and the Twelve” *ST III* (1950) pp. 66-200) それに対してプローゼは、パウロが「十二使徒」と自己との同等性を主張したため、「十二使徒」がさらに強調を

れ、結果的にパウロを背後に追いやったとみる。(E. Lohse, “Ursprung und Prägung des Christlichen Apostelates,” *Th. Z. IX* (1953) pp. 259-275)

(イ)パウロとは独立して発達した思想——ルカこそがこの概念

化の責任者。カムペンハウゼンは、パウロにとって「使徒」は、復活のキリストから「宣教」の使命を托された「宣教者」であるが、ルカにとっては「目撃者」、「証人」であって両者に関連が全くない。(H. von Campenhausen, “Der urchristliche Apostelbegriff,” *Studia Theologica* I 1948, pp. 249-257)。トロクメは、パウロと「十二使徒」との関係は、ルカの護教論的意図から説明する。その際、彼もルカの用いる「証人」(μαρτυρῶν)の中に、強度な神学的意味を見出している。(トロクメ『使徒行伝と歴史』田川訳、一九六九年、九八頁)。シユミッタは更に徹底して、ルカはグノーシスの「宣教者」から「使徒」概念を受けとったと考える。(W. Schmithals, *Das kirchliche Apostelamt*, Göttingen, 1956, 116 f.)

(ロ)パウロの「使徒」としての影響力を決定的要素と見る考え——クラインは、ルカこそパウロの中に真実な「使徒」のイメージを発見し、それを「十二使徒」に投影したと考える。(G. Klein, *Die Zwölf Apostel*, Göttingen, 1961, p. 202)

さて、以上の「使徒」の起源に関する諸説の概観から、一つの十全な説明が不可能であることが明らかである。(S.G. Wilson, *The Gentiles and the Gentile Mission in Luke*

Acts, Cambridge, 1973, p. 114) それで、われわれは、聖書のテキストそのものから、ルカの描く「使徒」を究明してゆく以外に方法はなす。

三、共観福音書における「使徒」と十二人の弟子

共観福音書で「十二使徒」の研究対象となるのは、「使徒」の選出と伝道に関する記事に「応限定される。そこで三福音書をまず比較検討しよう。

(1)マルコとルカ——全体的には、ルカはマルコを資料として忠実に従っている。しかし、デュボンがルカがこの個所に関していえばマルコより古い資料を用いていると主張する。そうであるとしても、両者の記事はほぼ平行的である。ただベルゼブル論争とバプテスマのヨハネの死はルカでは除外されている。そのかわりルカは6・20と8・3にいわゆる平地の説教を挿入する。しかしその後ではマルコの記述に戻る。従って選出、宣教、帰還などはすべて同じコンテキストで述べられていることになる。すなわち、ルカは少なくとも「十二使徒」に関しては史実と伝承に忠実であろうとすることが明らかである。

しかし、マルコでは弟子の選出はルカとはかなり異なった役割を果たす。主はユダヤ教指導者の敵意をはっきり受け止め(3・6)、海岸における悪霊追放の後、群衆から離れて「みこころになつた者たちを呼びよせて」(3・13)弟子を選任する。ルカもマルコと同じ五つの論争を記すが、パリサイ人、群衆と

の決裂はマルコ程決定的ではない。ルカでは選出は前の事件と直接的関係を持たず、平静の中で行われる。さらに、選出、伝道の要約、説教は一連の出来事として描かれる。マルコのような高揚を選出の記事は持っていない。

ルカの選出の特長は、十二人が多くの弟子団の中から選ばれることにある。デュポンはそれこそが、ルカがマタイ、マルコと異なった古い伝承に依拠している証左だとする。彼によれば弟子の選出は、ルカでは説教の一部として位置づけられるとされる。

(2) マタイ——マタイの最大の特長は、選出の記事そのものが存在せず、弟子の帰還の記事もないことである。そこである人はマタイがより古い伝承に基づくと考ええる。彼が宣教の部分ではじめて、「十二使徒」を登場させるからである。これはガリラヤにおける主の伝道の要約(9・35-37)の後に置かれている。マタイは、興味深いことに、4・23-25でも、ほとんど同様の総括を行う。それは山上の説教に続く。後者は山上の説教の序として、前者はイエスの教えと癒しに関する詳細なリスト後に置かれている。イエスはこの時まで単独で働かれたが、その後イスラエルの失われた羊のために、共に働く小群を形成される。この二つの要約はマタイが、マルコとは異なった伝承を持っていたこと、そしてかなり思い切った編集をなしたことを示す。総括から選出の間に説教を挿入したのはマタイだけである。ところが、十二人の宣教活動では、マタイもマルコ

とほとんど同一の記述となる。

(3) マルコと「十二人」(Doeksa)

前述のごとく、マルコは「十二人」を極めて意図的に描く。それは正統的ユダヤ教指導者とイエスとの対立が激化し、主の関心が群衆から小グループに転じた時登場する。すなわち、彼らを「自分のそばにおくため」、「宣教につかわし、悪霊を追い出す権威を与える」(3・14)ためである。こうして、彼らはイエスにたえず伴いゆく者となり、彼自身と同じ仕事を行う者として立てられる。マルコは、復活後の「使徒」の働きが、すでにこのガリラヤ時代にルーツを持つことを暗示している。

(4) マタイと「十二弟子」(Aadhts)

上述した点が正しければ、マタイはあえて弟子の選出を省略することににより、イエスの教師、奇跡を行う人であることを高調せんとしたといえる。十二人が宣教活動の中で紹介された時、彼らは主と同じ言と業へとすでに召されていた。マタイは、伝統的な「十二人」という言葉を用いる(20・17、26・20)が、大半は「十二弟子」(10・1、11・1、20等)を用いている。他に「彼の弟子」、「弟子たち」を十二人のコンテキストの中で、しばしば用いる。マタイでは十二人の弟子性が強調されていることは明らかである。

四、使徒行伝における「使徒」

ルカは、伝統的タイトル「十二人」(Doeksa)を一回、それ

に関連して「十一人」(Afsaka)を二回、行伝一章で用いている。1・22では、マツテヤが十一人と共にこの中に数えられる。2・14では、「ペテロは十一人と共に立ち上って……」とある。こうして、ペテロを筆頭とする十二人の「使徒団」の存在が浮び上がってくる。

6・1-6の執事の選出では、「使徒職」の宣教と祈りの基本的性格が明確にされる。彼らは執事に按手を執行する。彼らはエルサレム教会において確固たる立場を樹立し、教会政治、信仰の両面において権威ある指導者として考えられていた。ヤーヴェルは、この十二人の姿をルカ22・24から説明し、ルカは「十二使徒」を終末論的、イスラエルの十二部族の長として、その救済史の中に位置づけたと考える。(J. Jerrell, *Luke and the People of God*, 1972, p. 78以下) ヤーヴェルはコンツェルマンを批判し、ルカには一つのイスラエルの思想しか存在しないと主張する。その救済論の是非は別として、われわれは、「十二使徒」がルカの創作であるとの根拠を、テキストから読みとることは不可能である。彼らは現実には復活の主の依託を受け、聖霊によって任命された人々である(1・2)。教会はその証言と教えを守り(2・42)、彼らの行う多くの力ある業を見る(2・43、4・33以下)。

彼らは兄弟たちの間の共同生活のリーダーであり、その働きのゆえに投獄され、サンヒドリンに引き出される(5・18、19・40)。エルサレム教会迫害の際には、彼らは全ての人々が去っ

てもエルサレムに留まった。

彼らは、ペテロとヨハネをサマリヤにつかわす(8・14、18)。パウロはダマスコにおける回心後、彼らに加わる(9・27)。ペテロは異邦人コルネリオの受信を、エルサレムにおける彼らに報告する(11・1)。

最後に、長老たちと共に、彼らはエルサレム会議で中心的役割を果たす(15・2)。彼らは割礼について、パウロとバルナバと話し合う(15・2)。さらに、お互いの中から、使徒をアントオケに派遣する(15・22)。そして、実際に書簡を諸教会に持つてゆく(16・4)。行伝では、この時点で「使徒」の名は消えてしまう。

注目すべきことは、行伝においては「使徒」はしばしば「エルサレム」と関連して用いられていることである(8・1、14、9・28、11・1以下、15・2、4、16・4)。これによっても、ルカが十二人をエルサレム教会の指導者と考えていたことが明白である。

さらに補足的なことであるが、「弟子」(Aadhts)は、行伝においては、福音書と異なって決して「十二使徒」には用いられない。「弟子」とは信仰者全体を指す。14・21では *adhtseu* (弟子とする)は *edarykhesdar* (福音を伝える)と同義に用いられている。

こうして、行伝においては、14・4、14を除いて、「使徒」は常に「十二使徒」であり、イエスの生涯と復活の証人とし

て、エルサレム教会の宣教と教育の規範的指導者であった。申すまでもなく、エルサレム教会における彼こそイエス・キリストの権威を代表していた。

五、ルカによる福音書における「使徒」

福音書においても、ルカはイエスの弟子を必ずしも十二人に限定しない。ルカにとって、弟子はマルコのように、エソテリックな少数者の群ではない。それはより大きく開かれた概念である。十二人は、多くの弟子たちの中の指導者として登場する。ルカは、「十二人」(Twelve)の語を放棄せず(9・1、18・31他)、とくに8・1ではマタイ、マルコとは異なったコンテキストで提示する。またルカは、マタイ的「十二弟子」の語をも「十二使徒」として用いる。しかし、マタイよりも「弟子」は広い意味を持つ。たとえば14・25以下では、主は真実の弟子たることは何かを、十二人だけでなく、群衆全体に語りかける。

ところが、6・14では、十二人を他の弟子から明確に切り離す。それが「使徒」である。彼らは宣教につかわされ、悪霊を制し、病気をいやす権威を与えられた(9・1)。しかし、宣教につかわされたのは、十二人だけでなく、別に七十人(七十二人)も同様であった。17・5では、十二人は自らの「信仰を増して下さい」と懇願さえする。

そこでルカは「使徒」の独自の職務と働きについて、二つのルカの「十二使徒」と少しも矛盾するものではない。むしろ彼らが行伝の中で果してゆく役割を説明しているとも云える。ルカは、それを最も意識的に、伝承に基づいて記したのである。

ルカの使徒観を最もよく示すものは、行伝1・15〜26にあるマツテヤの選出である。ウィルソンは、「くじ引き」が旧約以来の伝統的方法の一つであり、最古の伝承に属するとしている。(Wilson, *前掲書* p. 102以下(脚注)) レングシュトルフも、ここでペテロが指導者として立っていることは、原始教会の事情を忠実に示していると指摘する。ここでルカは、「使徒」はイエスの全生涯の証人であるとともに、復活の証人でなくてはならないとの二重の「証人」を強調する。カトリックの研究者はここからイエスの生前と復活後の使徒との直接性を説明しようとする。(cf. Schuyler Brown, *Apostasy and Perseverance in the Theology of Luke*, Rome, 1969) その問題はあるとしても、ルカが復活を主の生涯のクライマックスと考え、地上の生涯と別個に考えてはいないことは注目に値する。少なくとも、「使徒」は生前のイエスと復活後の教会の連続線上に位置する歴史的「証人」なのである。

さらに、マツテヤの記事は、「使徒」の選びが、主の選任であるとともに神の選びであり、聖霊の業であることを示す。ルカは、「十二使徒」は歴史的イエスによって直接選ばれたと同時に、神が聖霊によって選出されたことを強調する。「使徒」

重要なテキストを与える。一つは、22・14以下の晩餐の説教の中で主が語られる言葉である。とくに、22・30の「わたしの国で、食卓について飲み食いさせ、また位に座してイスラエルの十二部族をさばかせるであろう」という言葉は、確かに終末論的表現である(D. Javal, *前掲書* p. 88)が、同時に、新しきイスラエルである教会における「使徒」の職務と符合する。

他の一つは、彼らが復活の証人として、甦られた主より派遣されるテキスト(24・46)である。「使徒」は最初主の復活を信じられなかったが、二人の弟子がエルサレムに帰ると、「主はほんとうによみがえって、シモンに現れなされた」(24・34)と証言していた。ルカはここに、行伝一章で「使徒」の資格としての「(主イエスが在世中)ヨハネのバプテスマの時から始めて、天に上げられる日まで終始行動を共にした人」(1・22)、しかも主の復活の「証人」という条件を、十一人が満たしていることを示す。

六、ルカの描く「使徒」とその歴史性

ルカは、共観福音書記者の中で、「十二弟子」の「使徒」たることに、特別な関心を払った人であることは、以上の論述で明らかであろう。しかし、だからと言って、それが彼の創作であるとか、神学的概念であるとは言えない。マルコもマタイも少なくはあるがそれを用いているからである。そして、マルコの「十二人」、マタイの「十二弟子」はそれぞれ特徴を有しつつ、の権威は主イエスにさかのぼるのみならず、聖霊と神ご自身の意志に由来する。「十二使徒」は、本来主の復活の証人(1・22)である。しかもこの中心的出来事に導く一切の出来事も、証しできる人でなくてはならない。行伝1・8にある通り十二人は、「公的証人」として地の果てまでつかわされる。それは神によってあらかじめ定められたことである(行伝10・40以下のペテロの説教)。また、これはさらにさかのぼって、聖書の預言の成就である(ルカ24・48)。その時、主はモーセの律法と預言とを開き、彼らの「証人」としての選びを保証しておられる。

「使徒」の「証人」たることは、彼らの働きと業の中で実証される。とくにペテロの説教の中で繰り返しそれが語られる(2・32)。そして彼らの業も、同じ主のみ名によることの「証し」である(4・8〜21)。

「証人」としての「使徒」は、五つの説教の中で聖書と預言の成就として語られる——詩110・1(2・34)、イザヤ52・13(3・13)、申命記18・15—16(3・22)、詩118・22(4・11)。その他3・18、10・43では一般的にこれが主張される。

さらに、「使徒」の証人性は過去の問題としてではなく、現在の出来事として、主のみ名による救いと奇跡によって実証される(4・10、10・42以下、13・31)。

最後に、「使徒」の証しは、人々に対して行われるものである。この場合コルネリオ以外には、その対象となるのは「イス

ラエルの家」(2・36)である。しかし、この証しが異邦人を
含めた全世界に対するものであることは、彼らの仲間に加わっ
たパウロによって実証される。

以上の通り、ルカは福音書においても、行伝においても、
「十二使徒」が主イエスの復活の証人として、その第一の務め
を果たしたことを述べている。しかし、それでは他の多くの証人
の中から、なぜ十二人が選ばれ、「使徒」として立てられたの
か。

それは、行伝十六章に至るまで、ペテロ以外の使徒の働きは
ほとんど記されていないにもかかわらず、彼らは常にグループ
として、教会の公的「証言者」として、規範的役割を果たして
いることに答を見出すべきであろう。六人の執事、パウロとの関
係もここから説明されるべきである。

ルカは決して、14・4、14で不注意にパウロとバルナバを
「使徒」と呼んだのではなからう。(cf. E. Haenchen, *Apo-
stelschichte*, S. 360でのコンコンの説明は正しくなく。)ル
カは、パウロとバルナバを「使徒」と信じていたのである。彼
らこそ十二使徒の正しい信仰的規範を踏襲し、異邦人教会を
「使徒的教会」とした「使徒の中の使徒」であった。

すなわち、パウロも、後に続く教会も、「十二使徒」の証言
を、真実な伝統として受け継いでいったのである(1コリント
15・3)。パウロはそれ故、行伝22・15、26・16で「証人」と
呼ばれる。

七、結 論

私たちは、ルカが二つの書の中で、「使徒」を自らの独断や、
神学に基づいて描いたものではないことを見てきた。「使徒」と
その働きは、彼が伝承に基づいて原始教会の歴史を書こうとし
た努力の表われである。「十二使徒」は、イエスによって選出
され、その生涯において「使徒」としての任務を遂行し、原始
教団においては、実際に主の復活の証人として決定的役割を果
した人々であった。初代教会は確かに宣教の教会であった。パ
ウロの「宣教者」としての「使徒像」が問題とされる理由もそ
こにある。しかし、パウロも、本来主の復活の証人であり(三
回のダマスコ記事)、「十二使徒」のまぎれもない後継者、異邦
人教会における「選びの器」であった。しかし、ルカはパウロ
の「使徒」性を信じつつ、なお「十二使徒」の証言の規範性の
故に、パウロだけでなく、他の全ての弟子と彼らを区別したの
である。それはパウロの選びが、復活の主ご自身によったと全
く同様に、「十二人」の選びも、神ご自身のご計画であったか
らである。かくして、ルカは今日もなお、私たちに「使徒的教
会」とは何を意味するかを最も明確に示す人だといえるであろ
う。そして、パウロこそ、その内容を満たし、提示する人物な
のである。

省略

Ev. Th. Evangelische Theologie, Munich.

ST (st. Th) Studia Theologica

Sr ExAv Svensk Exegetisch Arsbok. Upsala

TWNT, Theological Dictionary of New Testament.

TZ (Th. Z) Theologische Zeitschrift, Basle,

誌面の都合上、参考文献は割愛します。なお、これは、一九
七七年十月三十一日の、関西福音主義神学会における、研究発
表の要旨です(文献ご入用の方は、筆者までご連絡下さればお
送ります)。

(日本自由メソジスト岸之里教会牧師)